

## 郷土芸術の再評価と文化資源の共有化

渡邊 太 (Futoshi WATANABE)

### 【目的】

本研究は、長谷川富三郎、高木啓太郎、吉田たすく、徳吉英雄など鳥取県中部の郷土作家たちの芸術活動について、現代社会の文脈をふまえて再評価するとともに、郷土の芸術を地域の文化資源として位置づけ、その共有化の方法を探るものである。

倉吉で小学校教員として勤務する傍ら、民藝運動に参加し膨大な板画作品を制作した長谷川富三郎や、カメラ屋、民芸品店、蕎麦屋等を経営しながら多様な手法による表現活動を展開した写真家・高木啓太郎など、郷土の芸術家たちの作品は地域で親しまれている。地域社会のなかで豊かに育まれてきた文化は、郷土のアイデンティティを育む上で重要である。

近年、柳宗悦に始まる民藝運動を再評価する動きが見られる。日常生活の中に「用の美」を見出す民藝の視点は、高度消費社会の現在だからこそ高い批評性を有する。本研究では、郷土の芸術家たちの活動について、民藝再評価や地方創生といった現代的文脈からの再評価を試みることで、地域活性化の手がかりを探りたい。

○共同研究者・協力者 岡田 有美子 (明治大学 大学院理工学研究科 博士後期課程)

### 【内容】

本研究では、郷土芸術の再評価と文化資源の共有化に取り組んだ。郷土芸術の再評価のために、1940年代に発行された民藝同人誌『意匠』の内容を精査し、その意義を検討した。鳥取中部の民藝運動史では、敗戦直後に刊行された同人誌『意匠』が重要である。同誌の存在は先行研究によって指摘されていたものの、内容の詳細については不明な点が多かった。そこで、1946年から1948年にかけて第4号まで発行された『意匠』を入手し内容を精読するとともに発行の背景を探った。

『意匠』の編集・発行は、倉吉の画家・徳吉英雄による。執筆者の名前をみると、板画家・長谷川富三郎、後に染織家として大成する吉田たすく、赤碕の写真家・塩谷定好の長男である塩谷宗之助、大橋旅館の経営者で後に倉吉町・市議会議員を務めた大橋二郎、上神焼上神山窯の山根藤一、河井寛次郎に師事した陶芸家・生田和孝、砂丘社同人の画家・小田幸子、波田野幸治、福留章太など、鳥取中部の芸術文化を代表する多彩な顔ぶれであった。

徳吉英雄は、『意匠』刊行の意図として、本誌を通じて「意匠」の重要性をともに見出し、工藝にかかわる様々な立場の人びとが心を合わせて、郷土の生活を豊かにする工藝の質的向上を目指すことと述べている。

同誌の内容は、口絵、板画などの平面作品と寄稿された文章からなる。板画は、長谷川富三郎や吉田たすくら郷土の作家が主に寄せているが、第4号には世界的に評価の高い板画家・棟方志功の作品も寄せられている。棟方は、長谷川富三郎や吉田たすくの実家である伊藤家と交友があり、しばしば倉吉を訪れていた。

第1号から第4号まで毎号掲載された特集記事「愛用の品」は、生活のうちに芸術を見る『意匠』の理念をよくあらわす。「愛用の品」特集には、寄稿者が「煙管」「フォーク」「飯櫃」など、日々実用している品物への愛着を述べた文章が集められている。いずれも特別な逸品ではないが、

日々の用になかなう素朴な美しさをたたえ、個人的にも思い入れの深い品が紹介されている。

さらに発行者らは、同人誌の発行と並行して民藝店「風土」の共同経営にも取り組み、独自の流通のしくみを作り出すことにも努めた。このように『意匠』は、柳宗悦における「用」と「美」の理念に即しながら山陰の地で新しい工藝の美の創出をめざしていた。

鞍田崇は、2012年に日本民藝館の館長として「無印良品」等で知られるデザイナー深澤直人が就任したことを象徴的出来事として捉え、現代の社会意識と生活意識が民藝への共感を増しつつあることを指摘し、「いとおしさ」をデザインする営みとして民藝の可能性を評価している<sup>(1)</sup>。生活と芸術を接続し、郷土の物質文化をより良くする意欲と熱意に溢れた『意匠』は、高度経済成長を経て暮らしの豊かさへの見直しが求められる現代においてなおアクチュアリティを失わない。

本研究では、文化資源の共有化のためにWikipediaの積極的活用を提案する。Wikipediaの具体的な項目としては、長谷川富三郎、高木啓太郎の項目に加筆し内容の充実を図った。また、砂丘社、徳吉英雄、中井金三については新規に項目を作成した。



図1 Wikipedia「砂丘社」記事

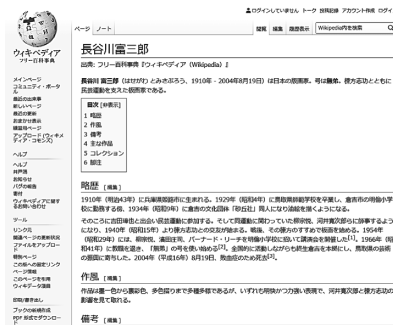


図2 Wikipedia「長谷川富三郎」記事

Wikipediaはインターネット上で利用できるフリー百科事典であり、世界中のボランティアによる共同作業によって多言語で執筆されている。商業広告を用いず主として寄付によって活動する非営利団体「ウィキメディア財団」が所有・運営する。メディアとしての特徴は、誰もがページを作りカテゴリをまとめることができるハイパーテキスト編集システムにある<sup>(2)</sup>。Wikipediaでは編集履歴の公開、編集方針の討議を編集システムに組み込み、民主的な合意形成にもとづく編集システムを発展させた。記事の信頼性を高めるのは平等な参加にもとづく人々の共同作業であり、誰もが執筆できるから情報の信頼性が低いというわけではない。

Wikipediaは、キーワードをリンクすることで他の記事と相互参照できる。たとえば、「長谷川富三郎」と「前田寛治」の記事は従来からWikipediaにあったが、新たに「砂丘社」の記事を開設しキーワードをリンクすることで、これまで独立に存在していた記事同士が相互参照により接続できるようになった。このように文化知を広く厚く共有するシステムとしてWikipediaの利用価値は高く、文化資源の共有化のためにさらなる活用が期待できる。

私たちは郷土の文化資源を見直し、現代の文脈でその価値を確かめることで郷土の精神の継承に努めたい。

#### 参考文献

- (1) 鞍田崇『民藝のインティマシー』明治大学出版会、2015年。
- (2) 佐伯悠「SNS&スマホ」杉村昌昭ほか編『既成概念をぶち壊せ！』晃洋書房、2016年。

#### 【成果】

- 「思い込みのゆくえ」明倫 AIR2020 展覧会トーク（久保田沙耶、伊藤泉美、渡邊太）、2020年。
- 「同人誌『意匠』と倉吉の民藝運動」『鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要』第82号、2021年。